

## コロナをきっかけに考えるロボットとのセックスと恋愛

沼尾恵（理工学部）

### 概要

コロナ対策の基本中の基本は、ひととの接触を減らすことである。やや乱暴な言い方をすれば、これはひとと会うな・話すな、ひとといっしょにご飯を食べるな・セックスをするな、ということになる。実際セックスについてカナダのブリティッシュ・コロンビア州の疾病対策予防センター（CDC）は、コロナ渦におけるもっとも安全なセックス・パートナーは「じぶん自身である」とガイドラインに明記している。その一方で、2020 年の夏、日本では「夜の街関連」の感染が連日のように報道されたが、どうやらひとは、リスクを承知のうえで、会話やセックスをもとめて（あるいはそうした需要の結果）街へ繰り出したようである（必ずしも夜の街＝接待をとまなう飲食店や接触をとまなう店ではないが）。

ひととの会話やセックスが感染リスクの高い行動ならば、代わりに人間のような外見をし、人間のように会話ができるロボットとの会話やセックスは可能性として検討する余地はないだろうか。いま現在の AI やロボット技術、またこうしたテクノロジーの普及率からして、セックス・ロボットが今回のパンデミックの対策になるというのは考えにくい。将来、セックス・ロボットが開発されある程度普及する時代が到来するかもしれないし、そのような世界でわれわれが再びソーシャル・ディスタンスをしなければならない状況に置かれるかもしれない。こうしたことはやや空想的かもしれないが、科学技術の開発が倫理的議論に先立ってしまっていることが危惧される今日、セックス・ロボットが開発中であるいま、先手を打てるという意味で、セックス・ロボットの可能性や問題点について今回のコロナをきっかけに考えることは、決して無駄ではないように思われる。

セックス・ロボットにまつわる倫理的問題は多くある。ひととロボットは、どのような関係にあるのか。ロボットはひとにとってどのような存在であるべきなのか。ロボットはどのような道徳的地位を占めうるのか。また、ひと／ロボット関係は、ひと／ひと関係にどのような影響をおよぼしうるのか。そもそもロボットはひとを象るべきなのか。今回の発表では、こうした問題を紹介するとともに、機械や道徳的主体性について高い関心があった 17 世紀イングランドの哲学思想にも目を向け、歴史的な観点の現代のセックス・ロボットの議論への応用可能性についても考察する。